

「〈繭〉としての技術」の領域越境性とその問題点

大久保 美紀（情報科学芸術大学院大学）

発表要旨：

『植物の生の哲学』で知られるイタリア人哲学者エマヌエーレ・コッチャは、『メタモルフォーゼの哲学』において、あらゆる生は唯一の同じ生であると説き、その連続性と遍在性、あるいは不死性を多角的に論じる(COCCIA2020)。コッチャの哲学は、いわゆる思弁的実在論や汎心論の枠組みで理解され、マルチスピーシーズ人類学や構造主義人類学とも高い親和性を持ち、昨今のエコロジーをテーマとした美術展ブームのなか、キュレータや批評家、作家によってしばしば参照されている。その一方で、その引用がエコロジー問題への感化という目的に収斂されるあまり、その思想の豊かな含意、とりわけ、技術に関する議論は取りこぼされてきた。

本発表は、『メタモルフォーゼの哲学』においてたった数頁を割いて提示される「〈繭〉としての技術」という考えに着目し、その領域越境的な可能性と問題点を論じる。生まれた後の卵である技術は、私たち自身を作り直す。同一の生でありながら全く別の種さながらに変態する昆虫類はもとより、それを取り巻く環境に浸りながら自らの形を変え続ける植物もまた、「〈繭〉としての技術」を持つ。私たち人間におけるそれは、身体部位や器官の機能を延長する次元にとどまるテクノロジーを意味するのではなく、それによって私たちが内部から作り替えられてしまうことこそが、ここでいう「繭」であり技術であると説明される。この考えは、技術をテクネーから切り離された機械技術の枠組みにおいてのみ捉える近代以降の技術観を見直す契機を与えてくれる。

スティグレールに学んだユク・ホイの「宇宙技芸」というアイディアは、西洋近代において一面化した機械技術とテクネーを区別し、技術の多様性を解く(HUI2021)。シモンドン研究者である宇佐美達朗は、コッチャによるこうした新しい技術についての考えを高く評価し、この技術論がアンリ・ベルクソンに端を発するフランスの哲学的系譜に位置付けられつつ、新たな観点を提示しながらその再考を促すと指摘する（宇佐美 2023）。「繭」が提案する技術論は、昆虫類の変態に着想を得ながら、その萌芽が植物の哲学において既に見られ、さらには、人類の技術論に揺さぶりをかける潜在性をもつという点で、現在の技術哲学研究においても重要視されるべきであり、その問題点を論じ、そのポテンシャルに着目することは、現行の技術哲学の問いを前に進めることに繋がるだろう。

参考文献

Coccia, Emanuele, *La vie des plantes*, Paris: Payot & Rivages, 2016.

Coccia, Emanuele, *Métamorphose*, Paris: Payot & Rivages, 2020.

宇佐美達朗「技術論の切り直しー『メタモルフォーゼの哲学』からの一般器官学の再考」. *Lmitrophe* No.2 (2023): 29-39.

ユク・ホイ『中国における技術への問い 宇宙技芸試論』伊勢康平訳, ゲンロン叢書, 2022.

ユク・ホイ『再帰性と偶然性』原島大輔訳, 青土社, 2022.